

読みを自覚し、 対話で深める物語文学習 ～座標シートを活用して

高松市立太田小学校

かじみちこ
加地 美智子

【実践の概要】

物語文単元で「読みを自覚し、対話をしたくなる状況」をつくるために、子どもたちが使える新しいツール「座標シート」の開発に取り組んだ。実践を通して、座標シートの効果を検証するだけでなく、子ども自身がこのツールの良さに気付いたり、指導と評価に生かせたりする等、様々な手応えが得られた。

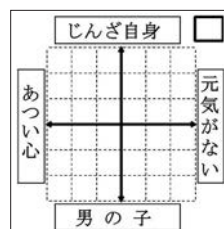
【論文内容の紹介】

I 研究実践

1 座標シートについて

自分の思いや考えをもつ場面で全員が容易に表現でき、対話において一目でズレまたは重なりが認識し合えるようなツールが必要だと考え、座標シートを開発した。対立軸をつくることで、中心人物の気持ちがどの辺りに位置づけられるかを考え、可視化することができる。

縦軸には人物を置くこととした。3年生が学ぶ物語文の多くは、中心人物の気持ちが対人物の影響を受けて変化する。そこで、中心人物を上端に、対人物を下端に置き、中心人物の気持ちが自身の内面に向いているか、対人物へ心を寄せているかを考えることとした。また、「中心人物の気持ちがどう変わったのか」という視点で、初めの気持ちを横軸の右端に、終末の気持ちを左端に置くこととした。



小学生用に開発した座標シート（教材文「サーカスのライオン」で使用）

2 座標シートを用いた実践－単元「感想をつたえ合おう」～「サーカスのライオン」

第1次 単元の学習計画を立てる

「何がどう変わった話か」を検討し、「元気がなかったじんざが、熱い心をもった話」と捉えた。そこで、座標シートの横軸の右端には「元気がない」、左端には「あつい心」という、子どもから出された言葉を置いた。

第2次 各場面の中心人物の気持ちを読み取る

じんざの気持ちについてペア対話を行う際、一人読みで考えた当該場面のじんざの気持ちを座標シートに表し（シールを貼り）、それを見せながら対話をした。シールの位置で、じんざの気持ちの捉えのズレまたは重なりが一目で分かる。この位置に貼った理由を話したくもなり、聞きたくもなる。読み取りの根拠とした叙述と、そこから想像したじんざの気持ちを伝え合ったり意見を言い合ったりした。

中には、想像して書けない子どももいるが、何となく位置を決めてシールを貼ることはできる。友達から「どの言葉（文）をもとにしてここに貼ったの？」と尋ねてもらうことで、自分の考えをもつきっかけになった。

その後、全体交流で読みを深めてから、本時のまとめをした。振り返りを書くと共に、場面の数だけ小さな座標シートを印刷したプリントに、本時の読みの結果をシールで表した。毎時間のシールの位置を見ることで、中心人物の気持ちの変化を追うこともできる。

また、子ども一人一人のシールの位置は、子どもの読みの過程を評価する資料ともなり得る。

毎時間、シールの位置から一人一人の読みを把握し、次の指導に役立てた。

第3次 読み取りを振り返り、感想を伝え合う

座標シートを用いて対話で読みを深めた過程を振り返り、感想を書いて交流した。

Ⅱ 実践を振り返って

実践を通して、座標シートの有効性が実証できた。文学教材の学習において、汎用性のあるツールだと思われる。これからも、このツールを活用していきたい。

奨励賞

(論文概要紹介)

主体的に運動に親しむ 子供の育成

千葉県立宮崎小学校

かわべとしあき

川邊敏明

【実践の概要】

本校は、850名を超す大規模校であることから、体育施設が常に混雑し伸び伸びと運動ができる環境になかった。また、体力にもやや劣るとともに病気や怪我で保健室に入室する児童も多いことが喫緊の課題であった。そこで、平成25年度より体育科を柱とした校内研究をスタートさせた。

生きる力の考え方に基づき、目標を仲間や運動への理解を深める中で能動的に運動に親しみ、工夫により技能を伸ばす態度を育てることとした。そこで、研究主題を「主体的に運動に親しむ子供の育成」に定め、体育学習を支える環境整備と授業実践を通じて子供たちの健康・体力

の維持向上を図ることとした。

【論文内容の紹介】

1 体育環境の整備について

- (1) 2学級合同による学習時間の割当
- (2) 体育専科教員を配置し、2クラスで2人の担任との3人によるチームティーチング体制（2C3T）を確立
- (3) 体育ノートの配付と活用
- (4) 朝のジョギングタイムの設定（任意）
- (5) 学校に隣接する公園の活用

2 3年間の授業実践（H25年～H27年）について

- (1) 指導方法
千葉市が推進している「めあて学習」に基づいた指導方法による実践
- (2) 実践の視点と内容
 - ① 個に応じた場や条件の中で活動できるように学習計画と過程を工夫し、運動の特性や魅力に触れられるようにした。
 - ② 導入方法を工夫し、身に付けさせたい基礎技能の習得を図れるようにした。
 - ③ 学習形態を工夫し、仲間との関わりを豊かにできるようにした。

(3) 成果

- ① めあて（課題）を決めて、意欲的に学習に取り組めるようになった。
- ② 友達との関わり合いが広がり、活動も活発になった。
- ③ 2C3Tにより、活動時間が確保され、教師側からの助言回数が大幅に増えた。

3 2年間の授業実践（H28年・H29年）について

(1) 課題

- ① 技能を向上させるための手立てと工夫の必要性
- ② 指導形態（保健）を工夫する必要性

(2) 実践の視点と内容

- ① めあてのもち方を整理し、自己の力に適した課題がもてるようにした。
- ② めあてに応じた活動資料や教具を工夫し、技能向上を図るようにした。
- ③ 養護・栄養教諭の専門性が同時に生かせるように、指導形態を工夫した。

(3) 成果

- ① 主体的・探究的に学ぶ態度が向上した。
- ② 健康に留意し、生活しようとする態度が向上した。

【まとめ】

体育専科教員の配置、2 C 3 Tの指導体制、体育ノートの活用といった体育環境の整備を基盤として5年間の授業実践を積み重ねたことで、主体的に体育学習に取り組む態度、運動に親しむ態度が身に付いた。その成果として、走・跳・投の運動能力が向上した。また、女子については体力・運動能力ともに大幅に向上した。保健室への来室児童数についても、減少につなげることができた。

奨励賞

(論文概要紹介)

タブレット端末の活用を通した授業改善の取り組み

青森市立新城中央小学校

まつもとこうへい
松本幸平

【実践の概要】

主体的・対話的で深い学びの実現を目指して、iPadを活用した授業改善に取り組んだことにつ

いての実践論文である。

iPadを活用して、教科書やノートをスクリーンで大きく見せるといった、誰もがができる授業改善から始まった本実践は、基調となる資料の発行や研究組織の立ち上げ、積極的な授業公開や視察の受け入れ、日常的な情報交換やミニ研修会の実施を通して、本地域全体に広がってきた。本校に赴任して2年、教師のICT活用指導力は着実に向上し、授業改善に関する教師間のコミュニケーションも活発になってきた。また、アンケート調査からは、教師の授業改善の姿勢が児童や保護者にしっかり伝わっていることも明らかになった。今年度は、児童にもiPadを積極的に活用させ、学校課題である思考力・判断力・表現力の向上を目指してきた。

【論文内容の紹介】

1 ICT活用能力の向上を目指して

- (1) 教師のiPad活用
 - ・大きく見せる
 - ・書き込みながら説明する
 - ・撮影した動画や静止画を活用する
 - ・目的に応じたアプリを使う
 - ・活動や作品、板書を撮影して評価する 他
- (2) 児童のiPad活用
 - ・ノート等の成果物の撮影や共有
 - ・インターネットやアプリの活用
 - ・動画や静止画の撮影や視聴 他

2 授業実践

校内研究のテーマである「授業づくりの3本柱（課題設定・学び合い・まとめと振り返り）の工夫改善」の手立てとしてiPadを活用した。

- (1) 6年「算数科」階段型の図形の面積
 - ・【導入】課題提示の際に付箋アプリを使って、図形を段階的に提示する（焦点化）
 - ・【展開】児童がiPadに書き込みながら面積の求め方の工夫を説明する（共有化）
 - ・【終末】児童のノート（練習問題や振り返り）

を撮影して大きく見せる（視覚化）

(2) 6年「社会科」明治の国づくり

- ・【導入】前時までの学習内容（江戸時代の様子）を拡大提示する（焦点化）
- ・【展開】分類・整理したグループの考えを児童が教師用端末に送信する（共有化）
- ・【終末】補足資料や児童のワークシートを撮影して大きく見せる（視覚化）

3 iPadを活用した授業改善の輪を広げる

- ・資料「iPadで授業を変える」の発行
- ・研究組織（iPad活用研究部）の立ち上げ
- ・通信（iPad研通信）の発行
- ・日常的な情報交換やミニ研修会の実施
- ・授業提案や視察等の積極的な受け入れ

4 成果と課題

iPadの活用で授業によりリズムが生まれ、練習問題や振り返りの時間の確保につながった。また、「資料を大きく見せたい、見たい」といった、授業中における教師や児童の突然の要求にiPadの活用で応えることができた。

本実践により、教師のICT活用指導力は向上し、学力検査から基礎学力の向上も確かめられた。また、保護者アンケートから、教師の授業改善への姿勢が伝わっていることが分かり、児童アンケートから、発表機会の増加や振り返りの充実も確かめられた。

一方で、思考力・判断力・表現力の向上にiPadをどう活用するか、限られた予算の中でのICT環境の整備といった課題については、工夫改善の余地を残した。今後も、ICTありきではなく、本来の目的が教師一人一人の授業改善であることを忘れず、教師も児童も「できた。分かった」を実感できる実践を重ねていきたい。